

K. D. ブラウン氏講演会

「北アイルランド問題」について

大西 晴樹

北アイルランド問題といえ、われわれ日本人にとってはるか彼方の、キリスト教の不寛容さを代表する出来事としてしばしば引き合いにだされる。「キリスト教が「愛」を説くのだったら、どうして、北アイルランドのカトリックとプロテスタントはいまなお互いに血を流しあっているのでしょうか」といった具合である。この問題は、社会学者として植民政策論の研究に励んだ矢内原忠雄がイギリスとアイルランドの関係を日本と朝鮮の関係にたとえたように、宗派抗争だけではなく、植民地問題としても説明されるべき問題である。ところが、近年あまりにもテロが横行（1969年以来テロによる犠牲者は3,000人を越え、なんと3日に一人の割合で殺害されている計算になる）し、その犠牲者の数の前にキリスト教不寛容論はますます説得力をもっているのである。

このようなとき、信仰者でありながら、社会学者であるブラウン氏がこの問題を取り上げたことはじつに有益なことであった。ブラウン氏は、北アイルランドのベルファスト市にある名門クイーンズ大学社会経済学部教授で、20世紀イギリス労働運動史にかんして幾多の業績をもつ著名な学者で

あり、日本学術振興会招聘研究員として初来日された。今回の受け入れ機関は本学経済学部であり、5月18日に本学キリスト教研究所と国際平和研究所共催で「北アイルランド問題」を論じていただいたのである。氏はまた、熱心なキリスト者として、ベルファスト市のご自宅の家庭集会から始まった教会の牧師の一人であり、その教会には、長年にわたる憎悪をイエス・キリストの福音によって和解すべく、プロテスタント、カトリックの双方から人々が集っている。したがってこの講演は、歴史・社会・党派の冷徹な分析のなかにも、和解をのぞむキリスト者の心情が見え隠れしたものであった。

われわれ日本人にとって、直面する問題にはかならず解決の道が用意されていると考えるのはごく自然の思考習慣である。解決されないのは、問題の立て方が悪いか、有効な手立てが提供されていないかのいずれかであると考えがちである。私の観察では、当日の出席者は全員その解決の道が講演のなかで示されることを期待して参加したのではなかったか。ところが、ブラウン氏の講演は、現在の北アイルランド社会を分析すればするほど、そのような楽観的な見通しから遠ざかっていくことを教えた。

この夏、カトリックの非合法組織IRAは、非暴力平和宣言を出した。まったく予断を許さないが、その推移を見守りたいものである。

なお、この講演は、10月に刊行予定の『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第27号に掲載さ

れる。

(おおにし はるき

所員、経済学部教授)